1 研究内容 1 児童生徒の思考に沿った単元デザインの工夫

(1) 課題設定、見通し

	成 果	課 題
センター発表会Ⅰ (中学3年理科)	<p>「セキツイ動物が進化をしたことを証明しよう」という課題を設定した。</p> <p>生徒が自身の興味・関心に応じて動物や資料の選択ができ、意欲的に学習を進めることができた。</p> <p>また、見通しにおいて「証拠を集めることで証明ができる」「仲間と力を合わせることでより深い証明ができる」ということを生徒と共有することで、主体的に学習を進められるようにした。</p>	<p>課題を解決するために、「自分一人よりも、友達と協力することで、効率よく、より説得力のある、確かな証明を行うことができる」という見通しをもたせられるようにしたが、実際の交流の様子から、見通しの共有が不十分であったと考えられる。</p>
協力校授業① (小学2年体育)	<p>「楽しく技を身に付ける『五条っ子マットランドのパフレット』を作って交流しよう」という課題を設定した。</p> <p>自分達で自由に「遊び」を考え、それをパフレットにするという学習を通して、児童の興味・関心を高め、最後まで意欲をもって学習に取り組むことができた。</p> <p>自分の力だけでなく、友達のよいところを発見し、それを参考にしようという見通しを共有した。そうすることで、単元を通じて友達と協力しようとする意志をもち続け、主体的に学習に取り組むことができた。</p>	
協力校授業② (中学1年理科)	<p>「鍵盤ハーモニカのしくみを考えよう」という課題を設定した。</p> <p>生徒に実生活で使ったことのある「鍵盤ハーモニカ」の内部構造について考えさせることで、意欲や好奇心をもち続けて学習を進めることができた。</p> <p>ハーモニカの内部は、分解をしなくても、音のしくみや他の音の鳴る物を調べることで明らかにすることができるのではないかと仮説を立てて探究していく学習活動を、単元を通して行うことで、見通しをもって主体的に学習を進めることができた。</p>	
センター発表会Ⅱ (小学4年社会)	<p>「屯田兵たちは、どのようにして旭川を開拓したのだろう」という課題を設定した。</p> <p>抽象的な学習課題を設定することで、児童から幅広い予想を引き出し、児童の興味・関心を学習内容とすることができた。</p> <p>学習問題の解決を目指し、単元の学習内容を劇化する方法を取ることで、単元の学習に意欲をもち、最後まで主体的に学びを進めることができた。</p>	<p>課題の設定を工夫し、学習対象を広くすることによって、児童の興味・関心をさらに高めて、より主体的に学びを進めることが可能であったと考えられる。</p>

(2) 自己決定、自己選択

	成 果	課 題
センター発表会 I (中学3年理科)	<p>探求するグループを複数設定し、生徒が自らの興味・関心に応じて、「何を学ぶか」を選択できるようにした。そうすることで、生徒が主体的に学びを進めることができた。</p> <p>個人で調べ学習をしたり、友達と意見を交流したり、「どのように学ぶか」を生徒が決定できるようにした。そうすることで、学習を適切に調整しながら学びを進めることができた。</p>	<p>学習内容や学習方法、学習時間について、「何を、どこまで生徒に委ねるのか」を、より吟味する必要がある。特に、学習時間について、本時は教師主導で調整した。しかし、どれくらいの時間が必要か、どれくらいの時間をかければ学びが深まるのか、ということ、日常的に生徒が自ら決めることが重要であると考え。そうすることで、学習調整を図りながら、より主体的に学ぶことができるようになる。と考える。</p>
協力校授業① (小学2年体育)	<p>自分がしたい動き、取り入れたい動きを自由に組み合わせたり、友達の遊びを参考にして、自分の遊びを工夫したり改善したりすることで、自分の興味・関心を高めながら、主体的に学習に取り組むことができた。</p>	<p>導入段階で、一通り児童へ技を知らせたり、場の使い方を伝えたりしたが、同じ場で活動している他の児童の「よさ」をそのまま模倣し、同じグループ内で似たものができてしまう様子が見られた。マットの置き方や学び方、遊びの構成への声掛けなどを工夫し、児童が自らの興味・関心に応じて学びを進めていくことができるようにする必要がある。</p>
協力校授業② (中学1年理科)	<p>音のしくみを学習する際に、自分が調べてみたい内容や、それをどのような方法で調べるかについて自分で決めることができるようにした。自らの興味・関心に基づいて学習を進めることで、主体的に学習に取り組む続けることができた。</p>	
センター発表会 II (小学4年社会)	<p>調べ学習では「自由進度学習」を取り入れ、調べる内容や順番、活用する資料などを、自らの意志で選択・判断できるようにした。そうすることで、児童は見通しをもち、友達と協力して調べ学習を進めることができた。</p>	<p>調べ学習の時間を教師側で設定し、その中で児童生徒の意志で学習を進めたが、時間配分に課題がある児童も見られた。時間設定を児童に委ね、見通しをもちながら学習を進めることができるようにすることも考えられる。</p>

(3) 単元レベルでの振り返り

	成 果	課 題
センター発表会 I (中学3年理科)	<p>単元を通して、同じ振り返りの視点を与え、生徒が自ら学習を調整しながら進めることができた。</p> <p>本単元で学んだことや自分ができたこと、できなかったことについて振り返らせることで、以降の単元での学習に振り返ったことを生かしたり、自分の学びについて改善を図ったりしようとする様子が見られた。</p>	<p>単元を通して振り返りを行い、その都度教師からのフィードバックを行うことで一定の成果を得られたが、教師の負担が膨大になった。指導計画と評価計画を吟味し、継続できるものを考えていく必要がある。</p>
協力校授業① (小学2年体育)	<p>児童の発達段階を考慮し、いくつかの視点を与えて、どの児童でも振り返りを行うことができるように配慮した。</p>	<p>児童の振り返りから、児童が自らの苦手や定着が不十分な所を自分の課題として捉えておらず、その改善に向けた取</p>

		<p>り組みがあまりできていなかったことが分かった。児童が自分の状況をメタ認知し、学習改善を図っていくことができるように、より具体的な振り返りの視点を与えたり、教師からの形成的な評価を充実させたりする必要がある。</p>
<p>協力校授業② (中学1年理科)</p>	<p>ポートフォリオを作成し、単元を通して、学習した内容や既習事項、さらに気付いたことなどの関連について、振り返りを重ねられるようにした。そうすることで、学びが次時へとつながり、高い意欲をもち続けながら、学習を進めることができた。</p>	
<p>センター発表会Ⅱ (小学4年社会)</p>	<p>「学級全体の学び」と「個人の学び」の二つの視点で振り返りを行った。学級全体の学びを振り返ることで、「劇化」＝「力を合わせた学び合い」の価値を実感し、協働的な学びの意義を感じられるようにした。また、個人の学びを振り返ることで、自身の成長を実感しながら、次の学びへとつなげることができるようにした。</p>	<p>振り返りの表現については、文章量やその内容に個人差が見られた。そのため、他者参照に加え、教師からのフィードバックや他教科、他単元での振り返りの機会の保障など、振り返りを充実させる日常的な学習習慣の確立が求められる。</p>

研究内容1の総括

- ・「課題設定」は、抽象度の高い「大きくくりな問い」を設定することで、児童生徒の興味・関心に応じた学習を進めることができた。このような課題設定は、児童生徒が自らの学びを進めていくうえで、非常に有用であることが分かった。ただし、これは探究的、問題解決的な学習との親和性が高く、あらゆる教科や単元に当てはまるものではないと考えられるため、今後のさらなる精査が必要である。
- ・「見通し」は、児童生徒と教師とが共有し、どのような学びを進めていくかを理解していくことが重要である。児童生徒の興味・関心だけを尊重するあまり、求められる資質・能力の育成が図られなくなってしまうことが考えられる。単元目標を明確に位置付け、その達成に向けた見通しを児童生徒と共有することが必要である。
- ・「自己決定、自己選択」は、児童生徒が自らの意思で学ぶ内容や方法を決めるという点では、一定の成果が出たと考える。一方で、「時間の配分」については、教師が主導で導いていく授業が目立った。「何を、どの程度まで児童生徒に委ねるのか」ということを更に吟味し、児童生徒が自走していくことのできる指導計画の改善が求められる。
- ・「単元レベルでの振り返り」は、振り返りの視点を与え、単元全体を振り返ることで、自分の成長や学びの価値を実感することができたと考えられる。単元での振り返りをその単元だけのものにせず、次の単元での学びにどのように生かしていくかの検討を重視することで、単元レベルでの振り返りの価値がさらに高まるのではないかと考える。

2 研究内容2 児童生徒の深い学びを充実させる本時の展開の工夫

(1) 発問

	成 果	課 題
センター発表会Ⅰ (中学3年理科)	グループ交流の際に、理科の見方・考え方を働かせられるような発問を意識し、交流が深い学びへとつながるようにした。	生徒の深い学びを実現するために、具体的な働き掛けを想定する必要がある。見方・考え方をより明確に意識したり、「深い学び」を4つの視点から整理し直したりすることが求められる。
協力校授業① (小学2年体育)	「する」「見る」「支える」「知る」という体育の見方・考え方を働かせられるように、それぞれの児童の技能の習得状況や、表現の様子などに応じて、適切に働き掛けをすることができた。	発問を端的にすることで、すぐ活動を理解し行動できる児童もいれば、見通しをもちづらい児童もいた。今回は、安全に配慮しながら、児童自らが選ぶことができる遊びの場として5カ所を設定したが、児童一人一人に適切な助言をすることができず、時間を意識して学習を行うことができない児童もいた。
協力校授業② (中学1年理科)	課題解決に向けて有効な理科の見方・考え方をカードにして、生徒に提示した。そうすることで、科学的な根拠をもって課題の解決に向けて学習に取り組み、深い学びを実現していくことができた。	「学びを活性化させる教師からの働き掛け」という点で、本時における「鍵盤ハーモニカの分解」の場面は、可能な限り生徒自身に行わせることで、より質の高い理解や考えをもつことにつながり、深い学びへと結び付いたと考えられる。
センター発表会Ⅱ (小学4年社会)	「事象や人々の相互関係」という社会的事象の見方・考え方を働かせられるような問い掛けを行うことで、ただ事実としての知識を増やすだけでなく、屯田兵の「具体的事例」と「苦心や努力」が結び付き、深い学びへとつなげることができた。	「先人たちの思いや願い」に注目させることも効果的であったと考えられる。発問を精査し、児童の深い学びの実現に向けて、さらなる工夫ができると考えられる。

(2) 必要感のある学び合い

	成 果	課 題
センター発表会Ⅰ (中学3年理科)	説得力のある証明をするためには、それぞれが調べた情報を合わせたり、取捨選択したりする必要がある。そのため、エキスパートチームにより、自分が調べている内容を深く理解した上で、他者と情報を持ち寄り、それらをつなげることで、より説得力のある証明にすることができた。	ただの「情報交流」で終わってしまい、グループ交流を有効に活用できないグループも見受けられた。「課題を達成するために、交流が有用である」「交流をすることで、より学びの質が高まる」と生徒が感じられるような学習や活動を設定していくことが必要である。
協力校授業① (小学2年体育)	「友達が試したいと思う遊び」を考えることが、学習課題を解決することにつながるため、必然的に友達に見せたり、意見を聞いたりする必要が生まれた。協働的な学びを通して、よりよい遊びを考えようとすることができた。	同じグループ内での交流が多かったため、交流するときに遊び方が偏っているグループが見られた。他のグループと積極的に交流するように声掛けをすることで、多様な遊びが生まれ、より深い学びに向かったと考えられる。
協力校授業② (中学1年理科)	それぞれが探究してきた内容を交流することで、自分の考えと他者の考えを	

	結び付けて、共通点や相違点を考えることができるようにした。仲間と協働することで、科学的な根拠をもって説明することができるようになった。	
センター発表会Ⅱ (小学4年社会)	劇を互いに見合っ、共通点を考えることで、それぞれの発表がつながり、「屯田兵の働き」と「苦心や努力」が相互に関連付いて、深い学びへとつなげることができた。	教師からの問い掛けや、児童の意見を整理することによって交流を進めたが、グループなど活動規模を調整し、話し合い活動を児童に委ねることで、必要感のある学び合いを行うことができると考えられる。

(3) 本時レベルでの振り返り

	成 果	課 題
センター発表会Ⅰ (中学3年理科)	振り返りの視点に応じて、各自が自分の学習を振り返ることで、次時への見通しや意欲の向上につながった。 ICT 機器を活用することで、教師からのフィードバックを適切に行い、一人一人に十分な形成的な評価を与えることができた。	本時の中で振り返りの時間を設定することができなかった。振り返りの時間自体を生徒の学習の中に位置付けることで、生徒自らが必要だと感じる振り返りを考えていく必要がある。
協力校授業① (小学2年体育)	友達と協力したり、友達の遊びを参考にしたりすることで、自分の遊びをよりよくすることができた、ということ振り返ることで、本時の学びの価値を感じ、次時以降に生かしていこうとする意欲を高めることができた。	早く書ける児童はより多くの友達の振り返りを参照することができたが、そうではない児童もおり、個々の振り返りの質や書き終わりに差が生じてしまった。児童の発達段階に応じて、他者参照をしながら自己の振り返りができるように工夫する必要がある。
協力校授業② (中学1年理科)	本時で鍵盤ハーモニカの内部が分かったため、調べてきたことと事実を結び付けて、より深く理解することができた。それを「他の楽器のしくみも分かるかもしれない」というように、新たな問いを生み出すことにつなげ、次時への見通しをもつことができた。	
センター発表会Ⅱ (小学4年社会)	学習課題を解決できたのは、「劇をして、学級で交流をしたからだ」と実感を伴って振り返りを行う様子が見られた。仲間と力を合わせて学習することの意義を感じたり、今後の学習への意欲を高めたりすることができた。	本時において、振り返りの時間を十分に確保することができなかった。児童が学びや思考を整理するために、しっかりと時間を確保し、言語化させることが必要であった。

研究内容2の総括

- ・「発問」については、「教師からの働き掛け」と大きく捉え、主発問や補助発問だけでなく、見方・考え方を働かせながら交流を活性化させるための、指示なども含んだものとして広く設定したことで、教師からの幅広い指導を取り上げることができた。発問を児童生徒の思考を促す指導者によるフォローと捉え直すことができたため、次年度は、発問の種類や場面を絞る、研究として明確に定義付けする等の工夫が求められる。
- ・「必要感のある学び合い」は、その学習活動を行うことで課題を解決したり、より深い学びができたことを、児童生徒自身が感じ、有用感をもつことが重要である。例えば、エキスパートチームで調べ学習をした後に、それぞれが調べた情報をつなぎ合わせて知識を相互に関連付けることで、深い学びを実現するといった、一定の成果があったと考える。一方で「学び合い」はあくまで手段であるが、学び合いをすること自体が目的化してしまい、本来目指すべき「資質・能力の育成」の達成がやや不十分になってしまったところもあった。また、子どもを主語にした学びを実現するために、子ども自身が必要感をもつことができるような、課題設定や指導計画の吟味も求められる。
- ・「本時レベルでの振り返り」は、振り返りの視点を与え、単に本時の学習を振り返るだけでなく、既習事項や他者との協働とのつながりについても、意識的に振り返りを行うことができた。また、ICT機器を活用することで、児童生徒同士による他者参照を可能にし、学習調整を図らせることや、教師からのフィードバックを適切に与えることで、充実した形成的な評価を行うことができた。一方で振り返りについては、児童生徒に「させる」からの脱却が求められる。児童生徒が、「したい」「した方がよい」と、自ら判断できるような学びの過程を、年間を通して習慣とすることで、1単位時間の振り返りの価値が高まると考える。

第20次研究 1年次 総括

- ・「主体的・対話的で深い学び」の授業改善の視点に今一度立ち返るといふ考えのもと、「子どもを主語にした」授業づくりに取り組むことができた。
- ・「課題設定」においては、教科の本質となるような「大きくくりな問い」を設定することで、各教科の「見方・考え方」を、児童生徒が自然に働かせることができたと考える。また、児童生徒の興味・関心に基づいて学習を進めることで、自由進度学習や複線型学習が有効な学習形態となり、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることができたと考える。
- ・一方で、「自己決定、自己選択」や「学び合い」は、あくまでも手段であり、その学習活動を取り入れることで、深い学びの実現が図られることが重要である。これらの手立てが、「資質・能力」の育成にどれだけ寄与し得るかを、さらに吟味していく必要がある。
- ・「振り返り」は、ICT機器を活用して、他者参照を可能にして自己調整を図りやすくしたり、情報を集約して形成的な評価をしやすくしたりするといった面で、一定の成果があったと考える。今後は、1単位時間の中での価値について、改めて検証を行うとともに、家庭学習との関連についても研究内容の一つとして捉えることも大切であると考えます。
- ・「発問」は、児童生徒に主体的な学びを促す、教師からの問い掛けや言葉掛け等と捉えたことで、さまざまな内容を取り上げることができた。2年次はより具体化させて、児童生徒の深い学びを実現させるために、発問の内容やタイミング等をさらに吟味することが求められる。

2年次研究に向けて

令和7年度(第20次研究 2年次)研究の見通し

- ・本研究は2年次計画であるため、令和6年度(1年次)の研究を踏襲して、引き続き研究・実践を行う。
- ・今年度と同じく、センター発表会Ⅰで研究の方向性を示し、2本の協力校授業、そしてセンター発表会Ⅱと、計4本の研究授業の実践を基に研究内容を検証していく。
- ・今年度は、全部で6つの研究内容を設定したが、これらを焦点化して、いくつかの研究内容に絞って重点的に研究を行うことも考えられる。